福生中学校創立当時の思い出

橋本兵五郎

(一) あいさつ

一昨年福生珠算学校長山崎茂男先生のお骨折で立派な『ふっさっ子』第一集が編集発行された。福生の青少年の教育上はもちろんのこと、広く世道人心を裨益するもの多大であったことを確信すると共に、敬意を表して喜んだのである。近くその第二集が発行される予定である由。不肖私にも何か福生の思い出を書いてもらいたいとのご依頼があったので、ガラでもないが、あえて筆をとることにした。

私は福生中学校に八年六ケ月、福生町教育委員会に六年六ケ月、前後通算して十五、六年の間、学校教育、社会教育、教育行政等を主軸としてご厄介になったので、思い出は数々あるが、とりわけ福生中学校創立当時の思い出が最も印象が深いので、ご参考になるかどうかは別として、あの当時の一端を書せていただくことにする。

昭和二十二年五月、福生中学校が開設されてから今年が満二十三年に当る。思えば月日の流れ

23年度福生中職員一同

背景は当時の福生中校舎。人物の中央が筆者，右より2人目は臼井武一氏

るのは早いものである。最初、福生第一小学校の七教室を借り受けて授業を開始、翌二十三年四月牛浜（現在の福生市立第三小学校の地）に独立校舎、ついで昭和二十六年十一月、武蔵野の台地（現在の市立第一中学校の地）に建設されたあの当時とすれば都下に誇る広大な校地、木造でこそあったが、豪華な校舎に移るまでの約四年七ケ月の間は、福生中学校の創業の時代であったと思う。

この間、町理事者、議会当局のご苦心、PTAの方々のお骨折、学校の主体である先生方、生徒諸君の勉強と努力等が生々発展して、今日の福生中学校の大をなしたものと考える。思えば感慨無量、創立二十三年を迎えたことを喜ぶと共に、多年にわたった関係者各位に対して衷心から感謝するしだいである。

㈡ 終戦直後の大改革

わが国は開びゃく以来の敗戦で、たちどころに三等国になり下ってしまった。国といわず地方自治体、一般社会も金はなし、物資は欠乏、国民の思想は虚脱状態、まったく極度に混乱した世の中、その上にあやまった自由主義や民主主義が横行し、心ある者は日本の将来をあやぶんだものであった。しかも福生町は他の市町村に見られない特異性をもった町であったので、新教育をすすめる上に困難なものが多々あった。

六三制はアメリカ教育視察団のサゼッションに基づいて出来たものであるが、こうした混乱した国状下で実施の効果はどうかと危惧されたものであった。

昭和二十二年三月二十九日、法律第二十五号をもって教育基本法を、同日法律第二十六号をもって学校教育法が公布された。同年四月一日付福生中学校設立認可、四月十九日付不肖私が初代校長を拝命、四月二十四日赴任した。五月二日役場において、町長、助役、学務委員代表、学校長等が参集し、開校式日取およびその方法について協議、五月六日開校の旨を告示、五月一日および四日の両日、内定した職員をもって協議会を開催、諸般の準備を完了。五月六日午前十時から第一小学校講堂において厳粛盛大に開校式を行ない愈々発足することになった。

誠にあわただしい段取りであったが、さて校舎はなし、教科書は不揃いである状態でもあった。期待される新教育に、学校教育の現実に、一大決意と努力をせねばならぬ時であった。

㈢ 職員諸君の教育に対する情熱と献身的努力

㈡に述べた通りの状況下で、第一小学校の表二階建六教室と平家建一教室（職員室に）を借りうけ、生徒三五〇名を一〇学級に編制し、一四名の職員で発足したのである。

職員一四名は小学校側より九名、青年学校より二名、元の中等学校より一名、民間より二名を招聘したのである。全部の職員が人格者であり、練成された方々であり、しかも教育に対する情熱が旺盛で、献身的努力を傾注されたのである。

校舎の不足は校外活用で補い、校具教鞭物の不備は職員の工夫自作、教科書の不揃いは補充教材を研究充当し、二度の校舎移転の時など土建屋さんや建築屋さんの仕事の一部までを先生にやっていただいたわけであった。

当時の世相、家庭環境の影響をうけていた生徒の学校生活をはじめとして、校外生活、家庭生活に至るまでの補導育成には並々ならぬ苦労や努力を要したものであった。

家庭訪問のごときも月並のものではなかった。全町にわたって、夜となく昼となく問題の起らぬ時の訪問に重点をおいてやった。

殊に年中行事である二十四町内の部落座談会開催等には、職員各位の特別な工夫と努力をお願

いしたことも記憶している。

要するに、創立当時の職員の勤務は、過度の精神労働でもあり、肉体的な重労働でもあった。しかもなんらの不平、不満もなく一致団結、ひたすら生徒愛に燃えての献身的奉仕であった。私の立場としては、常に職員諸君に対して心の中で頭をさげた。今の時代に比較するなら、超特級の勤務外手当の支給は当然のことであったと思う。過去のことではあるが、今もなお感謝をつづけている。

(四) 生徒諸君の勉強努力と学校諸行事への協力

こうした不備、不自由な教育施設の状況下に、将来に大きな希望と抱負をいだいて入学された生徒の諸君には気の毒であった。しかし、生徒の諸君はよく勉強もし、学校行事その他によく協力してくれた。

わずか五年ばかりのうちに、二回の校舎、校地の移転の時など、引越しの手伝いから校内、校地の整備等、我がことのように勤労奉仕に喜んで従事したのである。

今の子供には想像もつかないことであろう。忘れもしない昭和二十三年七月、牛浜の校舎に移転当初の正面校舎の数教室は、ゆか板のはれない教室での授業であって、生徒は敷居、どだい石に腰をおろして膝の上に教科書、ノートをひろげての勉強だった。こうした苦労、努力で勉強を

共にした当時の生徒諸君は現在、三十五、六歳から四十がらみの働き盛りにあって、家庭的にはよきパパであり、よきママであり、社会的には学界、産業界、経済界等に活躍されていることが容易に想像される。

(五) PTAの協力援助

終戦直後の混乱した世相と地方自治体の財政窮乏の折に発足した中学校のことで、校舎の建設、施設、設備等学校運営に不可欠の条件をみたすことは全国的に共通ななやみであった。

福生町でも当時ゆとりのある財政ではなかったが、町理事者、議会当局の深いご理解とお骨折りによってともあれ一年後の二十三年七月、牛浜の地に他町村に先がけての独立校舎が建設され一応の格好がついたわけである。

校舎は出来たものの、内容、設備、施設から校庭の整地、整備まで早急には出来ないので、PTAに協力援助を願ったのである。

PTAの性格、目的からして、学校の後援団体であってはならないことは承知の上であるが、当時の情勢からして、もとの父兄会のように物心両面からの後援活動を願わざるを得なかったのである。おそらく他町村もしかり、各中学校の今日の盛況は、けだしPTAの協力援助の賜であったと言っても決して過言でないと信ずるものである。

公費による設備、施設以外に、学校側より要望した設備、施設や学校の行事等で、協力援助を願ったものは数知れない程沢山ある。とくに、二度の学校移転に際しての校庭の整地を始めとして、植樹や外さくの築造等最初の頃はことごとくがPTAの勤労奉仕によって出来たものである。

風雨氷雪を冒しての勤労奉仕や、ひたすら生徒の幸福を念願しての貴い勤労奉仕など、当時を回顧して歴代の会長さんや会員の皆様方に厚くお礼申上げる次第である。

(六) 実験学校の指定実施とその成果

昭和二十七年度の当初、都当局から「貴校を道徳教育の実験学校にしたいがお引受け出来るかどうか」と話があった。しかし当時責任者の私としては即座にイエス、ノーは答えなかった。その後数回にわたって職員協議会を開催、慎重審議の結果、中学校側の要望する条件を都当局並びに町当局が了承出来るならば引受けてもよいではないかとの結論になった。この間研究討議に二ケ月もかかった。ことほどさように全職員は真剣に考えたのである。

要望条件が取入れられたので、いよいよ指定実験学校として発足することになり、委員会の構成、研究組織、目標設定、実態調査、指導組織体系等めんみつなプランが出来て二ケ年にわたっての実験学校を続けた。

中間報告もすませて、最後の研究発表会も多数の参観者に多大な感銘を与え、当局からは優秀

なる成績であるとの講評をうけて実験学校は終った。

スタートに際し全職員は「実験学校はだれのためでもない、本校生徒のためである。間接的には他校のためでもあり、教育界のためである。しかも職員自身の研讃のためである」と予期した通りの成果を得たので、全職員はわがことのように喜んで満足したのであった。

研究実験中の全職員の熱意と真剣さには、涙ぐましいものが多々あったが、本庁の先生方のご指導、町当局のご支援、父兄各位の協力、生徒諸君のまじめな勉強と実践等が一体となって推進されたことに感謝せざるを得ない。

教育はその対象である児童生徒の実態を知らねばならないし、家庭環境、地域社会の状況を把握しなければ成り立たないことが力説されているが、あの実験学校を実施中に職員並びに生徒が真剣に努力して得た実態調査に基づいておこなった指導と実験がああした成果をあげたことと確信する。

おそらく福生中学校の校風、伝統は、あの実験学校の実施によって本格的に基盤が築かれたものであると思う。そのことによって、また「名実ともに東京都下に福生中学校あり」と確認されたといっても過言ではないと思う。

(七) まとめ

いろいろと思い出を申しのべたが、感想の一端である。最後に教育能率を高め、教育を推進するための不可欠の条件は、何といっても、(一)よい指導者を得ることであり、(二)は設備、施設であり、(三)はよい後援者を得ることであると思う。

終戦直後、極度に混乱した時代、しかも他町村に見られない特異性をもった町に誕生した福生中学校が今日の盛況を示し得たことは、まったく前述の不可欠の三条件が満たされたことによってであり、とりわけ人を得たことであると確信する。

当時の関係者各位に深く感謝の意を表すると共に、福生市中学校教育の弥栄を祈念して筆をとめる。

(元福生中学校長)

新制中学十年のあゆみ

——福生中学のあらすじ——

臼井武一

「新制中学」という言葉が、社会から聞かれなくなった昨今である。学制改革により発足した

中学校は、まったく長い間「新制中学」という言葉で呼ばれた。制度上その通りであるが、何かその当時の中学校の実情を物語るような言葉でもあった。校舎はもちろんのこと、教材も整備されず、まして教具は皆無という中で、生徒だけは在学し、中学校という校名だけは立てられたのである。昭和二十二年の春である。設置者当局の方々、PTAの皆様方、教職員の困難さは想像以上のもので、全国津々浦々で、この共通の苦しみの中で、「新制中学」育成に当った。敗戦という有史以来の衝撃の中で、全国民が物心両面にわたって破壊寸前の状態であった。この欠乏のどん底で、中学校は創立されたわけである。

創立以来、二十余年を経て、今日、「新制中学」の言葉も聞かれなくなり、各地に立派な校舎も建てられ、教材教具も徐々に整備されて、中学校としての内容も充実してきたのである。その間の関係者の方々の御努力御苦心は、まったく並々ならないものがあったわけで、その結晶として、今日の中学校教育が確立されたと思う。

福生市の中学校も例外ではなく、この苦しい道程を辿って、今日の堂々たる校舎に表現されるような中学校に育ってきたのである。

福生中学校創立当時の歴史を初代校長橋本兵五郎先生が精細に記録された沿革史の中から転記させていただくことにする。

一、昭和二十二年三月二十九日法律第二十五号をもって教育基本法を、同日法律第二十六号をもって学校教育法が公布された。

一、昭和二十二年四月一日付東京都西多摩郡福生中学校が設立認可された。

一、昭和二十二年四月十九日付初代学校長として橋本兵五郎氏任命、四月二十四日就任された。

一、昭和二十二年五月二日役場において、町長、助役、学校長、教育委員代表が参集、開校式日取りおよび方法その他について協議の結果、五月六日午前十時より町を挙げて厳粛盛大に行なうことに決定した。

一、四月一日付役場から五月六日開校の旨告示された。

一、五月一日および四日の両日にわたり内定している職員協議会を開催、諸般の準備打合せを完了した。

一、開校式

五月六日午前十時から第一小学校講堂において開校式を挙行した。この日天気晴朗、別記式次第によっていとも厳粛盛大に式を終り、別室に宴席を設け、和気藹々裡に祝賀会を終った（時まさに十四時）。この日来賓七十名、父兄町民約二百名が列席、新制中学に対して如何に関心の度合の高いかということを示すものであって、力強い限りであった。

一、式次第（進行係　榊助役）

開式の辞（榊助役）

国歌斉唱

管理者挨拶（岸町長）

学校長挨拶（橋本校長）

告辞（地方事務所長代理　豊島教育課長）

来賓祝辞

職員紹介

閉式の辞（榊助役）

一、授業開始

五月七日から第一小学校表二階校舎六教室および平家建一教室（職員室に充当）を借受けて授業を開始した。

一、職員数　一四名

一、生徒数　三五〇名

一、学級数　一〇

一、三年を除いて二部授業

開校当初の状況がまことに明らかであり、橋本校長の将来に対しての深い配慮の程がうかがわれる。町を挙げての期待と援助のもとで、教員十四名、生徒三五〇名、しかも二部授業という条件の中で、福生中学校は誕生した。以来二十余年、毎年五月六日を開校記念日として祝福し、現在の福生第一中学校にうけつがれている。

希望と期待に胸をはずませ、教師生徒一丸となった第一年度の教育が開始された。悪条件の中で、体育祭も行ない、実地見学も実施されたことが、橋本校長の達筆で記録されている。町ぐるみの援助の様子、橋本校長以下諸先生の愛情と責任感がにじみ出た名文である。

時は流れて、昭和二十三年三月二十日、第一回卒業式が、第一小学校講堂を借用して挙行された。卒業生はわずか三十名である。福生駅前の大通りの両側には、ずらり何十軒という露店が立ち並び、さまざまの物が、ヤミ値で売られていた時代である。この社会情勢の中に三十名が巣立っていったのである。卒業生数も年毎に増加し、昭和四十五年三月までの累計卒業生数はなんと七〇二九名となった。まさに福生市発展の姿そのままであると思う。創立第一年度は終った。この間、町当局最大の御努力で、中学校への経費は（建設費を除く）七七三七四円七九銭である。隔世の感に堪えない数字ではあるが、敗戦困窮の中で、この数字は、なんと大きな重量感を感じさせることであろう。町を挙げての熱意がうかがわれる。

昭和二十三年四月十三日、新校舎（現第三小の校地）に引越しをした。戦時中の村山少年飛行兵学校の兵舎である。青梅線に並行した校舎はほぼ完成していたが、まだ窓硝子はなかった。雨が降ると、窓側の生徒は机を内側に移動しなければならない状態であった。この校舎と直角に東西に立つ校舎は、柱が立ち、屋根が出来たのみで、床も張られず、ごろごろした大きな石に腰をかけ、教科書を片手に持って授業もした。校庭は、米軍が建材として砂利を採取したままで荒れ果てた姿であり、大きな石がごろごろし、雨が降ると低地は水がたまり、時に、今は懐かしい自然情緒だが、蛍が飛び蛙のなく声が聞かれたものである。引越しの記録に、橋本校長は「この日折悪しく途中で大雨に会ったが職員生徒の歓喜と努力によって午前中完了した」と書かれた。まさに歓喜であった。それにつけても、現在の生徒の幸福さを考えずにはいられない。第一小学校から机や腰掛をかついで、蟻の列のように桑畑などでかこまれた野道を、歓喜に足どりも強く、新校舎へ急いだものである。

新校舎の建設も、当局の御協力で、急ピッチに進み完成した。七月二十三日である。そして落成祝賀式が十一月二十一日挙行された。校舎面積五五八坪、総工費四百万円と書かれ、祝賀式その他の様子が実に精細に記述されている。尊い記録である。

校舎は完成した。窓外は一面の畑地で、牛浜駅で乗降する人々の姿が、教室の窓から手にとるように見えた。家屋の建設もぽつぽつの状況である。校庭はまだ多摩川の河原であった。体育祭

の時期が近づいた。運動場はない。でも新校舎落成記念として、なんとか挙行したい。それは教員生徒共に通じる思いであり、PTAの方々もしかりであった。運動場を作ろうということになり、三者総力を挙げて、埋立てて、最少限の運動場を作ることになった。何日かかったか記憶にないが、道具も充分でなく、古いバケツなどを使って土を運んだ。慰霊碑の北側に露出していた赤土を蟻が物を運ぶように、何日も何日も運んで埋立てた。現在市営グランドの東側寄りの所を、南北に細長く埋立てたのである。今もあの赤土の一部が、グランドの地下にあるかと思うと感慨に堪えないものがある。とにかく泥と汗にまみれて運動場は出来上った。そして十月二十日が体育祭である。

橋本校長の記録には次のごとく書かれている。

「――殊に今年の体育祭は新校舎落成祝賀の一環としての行事でもあり、新教育即ち民主主義教育の精神に則って、生徒の自主的活動によって、行事一切を生徒の自覚的、自活的精神が発揮される様実施プランが計画されたので、生徒職員の意気ものすごく……（中略）……予想通り今年の体育祭は全く成功した。生徒は自分達でプランを立て、自分達の体育祭として真剣に活躍したのである。父兄も昨年に倍して参加、一般の観衆もものすごく、露店商四十数軒……云々」

昭和二十三年四月十三日から、昭和二十六年十一月一日まで、三年半を現三小の地にあった新校舎ですごした。二度目の引越しをして、現福生一中の校地に移動したわけである。この三年半を中心として、以後数年にわたり、福生中学校も全国的な例に漏れず、混乱を極めた時代でもあった。敗戦による極度の社会の混乱は、学校教育を異常にゆさぶった。数多い生徒の中からは、その影響をうけて、問題行動が続出した時代でもあった。世にいう非行化であり非行少年の続出である。非行の内容もまったく広範囲であり、グループ化し粗暴で破壊的であった。教師は教師であると共に、警察官のような仕事までせざるを得なかった。朝教室へ行くと、問題をもつ生徒はグループ化して欠席している。必ず家庭は出ているのである。それ大事とばかりに、幾人かの教師が自転車をとばして、彼等の行方をさがしに出発する。そんなことが週に何回となくあった。粗暴なグループのときは、まったく恐ろしい思いをしたこともある。この土地だけのことでなく、全国的に起った中学生の実態であった。

対策のための職員会議が夜半まで続き、疲労のためか、卒倒した教員の出たこともあった。

体育祭、展覧会等々の行事の上に、華々しい成果を上げた反面、個々人の中には非行化をたどった生徒がいたことは、まことに残念なことである。今は立派に成人され、社会の中堅として活躍されておられることと思うし、またそう願わずにいられない。

とにかく、混乱の中から、町ぐるみの「明るい社会をつくる」浄化推進運動が進められたの

も、この頃の世相であった。中学校の東京都実験学校実施も、この背景の中からとり上げられた教育の姿であった。

さて、昭和二十六年十一月一日、この日は中学校再度移転の日である。現福生一中の地に、木の香も新しい新築二階建の堂々たる校舎である。校舎建坪九四五坪、教員数二十七名、生徒数六五五名、十五学級でその年の卒業生数は二百名を越えた。同月十五日に盛大な落成式が挙行された。校舎は大きく立派になり、生徒数は益々増加して、町の発展をそのまま表現しながら、ここに一つ面白いというか、困ったというか、問題があった。この時までは卒業式のごとき全校参加の集会が、第一小の講堂を借用したり、前の校舎のように三教室打ちぬける仕組であったので、どうにか無事に行事をすますことが出来たのであるが、今度の堂々たる校舎にはそれがないのである。青空卒業式の始まりである。校庭に柱を打ちこみ、幕をはり、演壇を創設する。前日一日がかりで設営するのだが、その夜強風でもあると、当日の朝は見るかげもなくこわされてしまう。当日の朝雨がふれば延期である。案内状に「雨天順延」という言葉を記入したものである。PTAから、ぜひ体育館がほしいとの声が起りPTAとしては十周年記念事業として努力し町当局にお願いすることになった。PTA会員は毎日一円（記憶ちがいかも知れない）貯金をし毎月支部長さんが集金し、その月の二十五日に本部に納入することにした。一年余にわたった貯金を持参して町当局に建設方をお願いした。当局の御苦心の結果、体育館が建設されたのが昭和三十五

年春でこの年の卒業式が新しい体育館で挙行され、九年間にわたった青空卒業式に終止符がうたれた。懐しい思い出であると共に、町をあげての御努力御援助に胸をうたれたのである。西多摩地区で戦後最初の体育館であったと思う。

福生中学校十年史の上で忘れてならないのは東京都実験学校として二年間研究実践にとり組んだことである。昭和二十七年六月二十二日、実験学校指定。昭和二十八年六月二十三日、中間発表会。昭和二十九年一月二十六日、本発表会と二年間にわたって、第一次教育課程、第一次道徳教育の手引および読書指導の三テーマについて実験的な実践をしたのである。本発表会の研究集録の巻頭に橋本校長の言葉があるので転記する。

教科課程の研究並道徳教育の実践指導、いわば全学校教育の研究実践という課題をうけて、その責任の重大さに思い迷わざるを得なかった。しかし、我々の託された子供達は、諸般の事情から問題の多い子供、困った子供、それだけに気の毒な子供である。この子供達を、学習面に於ても、道徳面に於ても一日も早く立直らせ、全人格的に健全な発展を願うことこそ我々の光栄と責任であることに思い至った時、全職員の決意は一致した。期待されるような研究実践の成果は挙げられないかもしれない。唯、生徒の半歩の前進、一歩の成長が一日も早からんことを祈りつつ、おぼつかないながら全員一致協力して研究実践を開始した。以来二年は夢の間

に経過した。その間地域の特性から将来される研究実践の内容はまことに他にみられない程に、複雑多岐であり、根は深く、且広範囲であった。……（後略）……

当時の事情が浮彫りされた文章である。学校生徒の状態からして、教師にはまったく指定を引きうけるだけの自信も勇気もなかった。会議を重ねても結論は出なかった。時間的に結論を迫まられた時、橋本校長の言われた言葉が、前文の通りである。

「教材も教具も今のままでよいではないか、改めて金をかけて頂く必要はない、誰に成果を見て貰う必要もないのだ。要は子供のためだ。この荒れた子供達のために、どうしても指定がうけられないのか、一日も早く立ち直らせてやれないのか」

教員は一瞬我にかえった。そして決意したのを今も思い浮べる。校長の火のような愛情と信念は、当時の教員の胸深くしみ透ったのである。その方々は、必ず今も、橋本校長の姿として時にふれ思い出していると思う。教育の、時に最高の、時に最低の尊い信条であるからである。正式に指定されたのは六月二十二日である。以後二年間、校長の火のような言葉を胸に研究に突入した。今考えても、よくあれだけ頑張れたと思う。当時の教師の胸によみがえる感慨であろうと思う。それだけに二年間は「夢の間」であった。昭和二十九年一月二十五日は稀にみる大雪であった。三十糎以上もつもったと記憶する。

二十六日晴天。PTAの方々により牛浜駅からの通路の除雪をして頂いた。参会者二百余名、遠く他県からも来て下さった。現今のように各種の研究が積み上げられた時代とはちがい、まったく頼るべき柱もない時代の研究発表会であった。終了した時には涙の出るような気持ちであった。発表会を終って、さて子供を「一日も早く立ち直らせる」ことが出来たであろうか、と心をなやました。いろいろの意見批評はあったと思うが、福生中学校の教育に大きな足跡を残し、一時代をかくしたのは事実であって、十年史の一頁に忘れ得ぬ二年間であった。

十年史として、最後に書き留めておきたいのは、多摩高等学校定時制福生分校の開校である。昭和三十四年四月十五日のことである。

急速に発展しつつある福生町の勤労青少年に勉学の機会を充分に与えたいという、町当局および各方面の要望にこたえたものである。町当局の方々、多摩高校の校長その他、橋本校長やPTA会長等々、幾回となく、集合され、誘致運動に奔走された輝かしい成果である。以来十六年間、福生中学校に併設され、共々に育英の道に精進してきたのであるが、今春福生高等学校開設を機に、分校は本校として生々発展することになった。併設のため何かと迷惑をおかけした長い年月であったと思う。心からお祝い申し上げ、御発展を祈るしだいである。十六年間の分校の歴史は、また福生中学校の歴史でもある。

創立以後十年の間にはまだ多くの書くべき事情があるが、沿革史をひもときながら、その大筋をひろってみた。福生中学校として、最も困難であった、また全国的にそうでもあったが特殊事情のため、困難をきわめた十年間であったが、町当局、PTA、町民の方々の絶大な援助のもと、学校は、熱の人、愛の人、信念の人橋本校長を柱とし、統制されて、この時代をのり切ることが出来たと確信する。

悪筆の上、諸々の配慮も不充分であり、読者の皆さんの御判読を願う以外はないが少しでも新制中学創立当時の御参考ともなれば幸いである。

（福生第一中学校長）

「母の会」から〝PTA〟

原島順子

母の会発足

福生第一小学校に、母の会が誕生したのは、昭和二十二年の九月二十八日でした。そのころの子どもたちの衣・食・住の惨めさは、とても今の人たちには想像もつかないことです。その子ど

もたちに、学校の昼食時に皆が同じにあったかいものを食べさせてあげられないものだろうか、という思いは、当時の父母誰もの願いでした。

その頃の父母の組織は、学校後援会というものが戦前から続いてありましたが、これは父親だけの形式的な会でした。そこで、このような願いで、気のあった母親たちが結束していこうと、〝母の会〟の発足にまで発展させたわけです。

会長には、横田寛子さんが選ばれました。その発会にあたっての総会で私は座長に選ばれましたが、女ばかりであるし何をやってよいかわからず、草案を逐条読みあげていくだけでした。ほかの会員も別につっこんでものを言う方もなくて、なんでもいいからやってくれ、というご好意だけで成立してしまいました。

給食委員会

母の会のねらいは、先に申しあげたように児童のための給食が目的でしたので、給食委員会をすぐに発足させ、私がその委員長にまた選出されてしまいました。

たださえ乏しい食糧事情でしたが、その目的のために、長沢や永田辺の農家の皆さんは、貴重な自家野菜を寄付してくれました。それを煮る燃料に、ひどい苦労をさせられました。

ある雪の降る日に、学校から、あすの薪がないという連絡をうけたことがありました。三町内

の清水さんと二人でリヤカーを引いて、その雪の中をあちこち木片を貰いに歩きました。安藤木工所、飯田呑口屋さんのような所へいくと、かなりのこっぱがいただけて助かったのを、今でもありがたく思い出します。

母の会では、母親学級をつくり、当時、古谷綱武先生に、この福生で何回か講演していただきました。そんなことで、一時は家庭を忘れるほどの状態で、熱心に学校に出かけました。他の役員さんも、原島さんを見ていると私たちも黙っていられなくて、とよく出てくださいました。

運動会にスクェアー・ダンス

二十三年の運動会にスクェアー・ダンスを父母で踊りました。

田村先生や矢口先生が教えてくれて、それをぶかっこうな私たちがまじめに習いました。青年団員にもよびかけて参加してもらい、また父母の代りにその息子、娘さんたちも出てきて踊りました。それが何よりの機会となって、先生とそうした若い人たちで結ばれたカップルが、いくつもありました。先生同志のもありました。

練習の成果を運動会の日に発表しましたが、後援会会長の横田寿照先生も先頭で踊りました。でも、このスクェアー・ダンスは、当時のこの地方の人たちには、相当な刺激であったらしく、賛否両論が福生ばかりでなく郡内に溢れたらしく、この集まりは、この運動会だけでなくなって

しまいました。

母の会といい、こうした楽しかった踊りの会といい当時の第一小学校には来住野元一先生はじめ、とてもひらけた先生方がおられて、常に西多摩地方の先頭を切る行事を実行できたものでした。

母の会からPTAに

母の会は、なおさかんな活動ぶりでしたが、女だけの集まりはむずかしいものでした。特に、私たちは当時の人によく言われた〝よそもの〟でした。会合でいい意見を出しても、土地の人たちにそっぽを向かれると、最後のまとめはなかなかできません。そんなことがきっかけになってそれまで、物的な学校援助を中心にしてきた父親たちの学校後援会とここで一つになり、なおよりよい会にしていこうということになり、二十四年に福生第一小学校PTAの発足という段取りになりました。

ここで、私事になりますが、あのころの世相をうつした思い出話を二つばかり、書かせていただきます。

戦後、にわかに女性の地位が認められてきました。二十二年の秋に、民生委員の中に女の人を

ということで、この町で初の女性委員ということにさせられてしまいました。

女性ということからか、当時の〝夜の女〟と言われた人からも、いろんな相談をもちかけられました。近くにあった間組（はざま）の飯場が解散してしまい、そこの人夫の人たちが、早朝私の家の前にどやどやと来て、なんとかしろと言われたこともありました。ある母親が泣きながら、なにも食べさすものがなくて、今朝は醤油に熱湯をかけただけのつゆを飲ませて、子どもを学校にやりました、と言われた時など、どうしてよいか途方に暮れたものです。

そのころ、私自身も子どもざかりで、食べることに追われていました。「原島さんでは、人のことどころではないだろうに」などと陰口を言われ、そのことを気にして役場に辞任を出したこともありました。その時、当時の担当課長の橋本孝蔵さんが「貧乏人の委員さんで、いいじゃないですか。貧乏人だからこそ貧乏人のことがわかる委員さんでなければ困るのです。」と言われて、やはり人の言うことより自分の心が大事だと、辞任をとりやめたものでした。

二十八年の十一月三日に、NHKラジオの〝三つの歌〟という番組に、家族中で出演しました。たった一枚、ハガキを出したのですが、その時、家族の名前のおもしろさで出演を指名されたようです。名前をならべてみましょう。

卓雄（父）　卓也（長男）　卓美（長女）　卓枝（次女）　卓明（次男）　卓三（三男）　卓代（三

女）　卓康（四男）の顔ぶれでした。

司会は宮田輝アナウンサーで、スタジオでは灯りを、頭からも、正面からも、下からも浴びせられ、もうカーッとしてしまいました。三番目の歌を両親で歌えということになったのですが、その曲が〝旅の夜風〟なのです。それが〝愛染かつら〟の歌ということもわからなくなり、卓也がそばから私たちに教えてくれたのが、あとで見たテレビにはすっかり映っていました。

実はテレビにも映ったわけですが、当時、テレビは福生の町に数カ所しかなかったようです。それで、私たちには福生では見られなくて八王子の知りあいの所まで出かけて、自分たちのテレビ出演を見せて貰いました。

とりとめのない思い出話ですが、当時を思い出してなつかしゅうございます。

（主婦）